

ハマニンニク製の容器「テンキ」

—テーマ展「アイヌの工芸テンキ」および関連事業からの報告—

'Tenki'; Basket woven with *Leymus mollis*

-Report from the thematic exhibition "Tenki of Ainu crafts" and the related events-

荒山 千恵*

Chie ARAYAMA*

キーワード：ハマニンニク（テンキグサ），テンキ，石狩浜，製作方法，巻編み技法（コイリング）

1. はじめに

いしかり砂丘の風資料館では，平成24年度第2回テーマ展において「アイヌの工芸テンキ」を開催した（2012年7月4日～8月26日）．テンキとは，イネ科の海浜植物ハマニンニク*¹（学名：*Leymus mollis*／別名：テンキグサ，ムリなど）を材料に作られた容器類のことである（図1）．とくに，千島アイヌにより作られたものが江戸・明治期には広く知られていた．

ハマニンニクは石狩市の砂浜海岸にも帯状に広

く群生し，その海辺風景には欠かせない（図2，図3）．このことから，身近に生息するハマニンニクについて，植物学・歴史学・民族学などの多面的視点から興味や知見を深めることを目的に，テーマ展を企画することとなった．展示では，千島アイヌのテンキを中心に，北海道開拓記念館，北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園（以下，北大植物園と記す）から収蔵資料を借用した．また，斎藤和範氏（旭川大学地域研究所 特別研究員）のご協力のもと，テンキの製作工程について紹介した．関連事業では，2012年7月

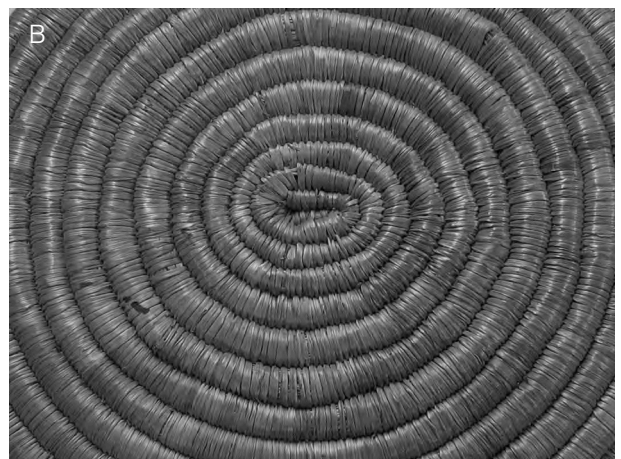


図1. テンキ（筆者撮影）．

A：ハマニンニク製の小物入れ（蓋付き）

容器径184mm 収集：1919年以前 所蔵：北海道開拓記念館〔資料番号11353〕

B：Aの底部中央の部分写真（巻編み技法）．

* いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

28日・8月4日に「親子体験講座テンキ編み」(講師：斎藤和範氏，石狩海浜植物保護センター共催)によるコースター作りを実施した。また，2012年10・11月には，「テンキ2012・秋プロジェクト」として，いしかり砂丘の風の会(資料館ボランティア)の方たちを中心に，小物入れ(容器)作りに挑戦した。本稿では，これらの事業報告を兼ねて，テンキの特徴とその製法について述べる。

本論に入る前に，本稿で使用する編物の組織にかかわる用語について説明する。編物の組織は，①交叉組織，②巻き組織，③振り組織，④輪奈組織の4種に大別される(吉本，1994)(図4)*²。そのうち，本稿で対象となるのは，主に②および③である。②は，「コイリング(Coiling)」や「コイル編み」とも言い，本稿では「巻編み技法」と呼ぶ。テンキでは，主に図3のGが該当する。また，③に該当する技法について，Roger. G. Roseの提示する‘Twining’には8種の模式図が描かれている(図5)(Rose，1983)。本稿ではこの技法を「もじり編み技法」と呼ぶ。ハマニンニク製品にも様々なもじり編み技法をみることができる。

2. 記述に残されたテンキ

記述や絵図などの記録に残されたテンキについて確認する。なお，引用文中の下線は，筆者によるものである。

A. 松前廣長の『松前志』(1781(天明元年))には，「テンキ」の項目に絵図とともに次の記述がある*³。

「方俗これをコタスと云。テンキは夷方の詞なり。是尋常の雑穀にあらず，水草にて編たるものなり，兵糧を入べき器なり。是亦北韃の産なり。図略之。或云，夷人のムルチと云へる草は，此一物を製するものなりとぞ未詳。」(松前，1972：309)

B. 秦憶磨の『蝦夷島奇観』(1800(寛政12))には，絵図「モロチキナ寫生」(ハマニンニク寫生)および「テンキ圖」において，次のように記

されている。

B-1. モロチキナ寫生：「此草，蝦夷地砂濱何處にも産せり。奥地に至にしたかひ，能生せり。シコタン島，エトロウ島勝れて長し。新苗を刈捨，夫より生出たる葉を仲秋に刈り，テンキといふ編袋に製せり。」(秦，1982:221-222)

B-2. テンキ圖：「モロチにて編たり。大小種々あり。エトロウ島シコタン島の二島に出る。女夷の作る處なり。美工密製愛翫すべし。」(秦，1982:222)

C. 鳥居龍蔵の「考古学民族学研究・千島アイヌ」には，「一七，円形籠」において次のように記されている。

C-1. 「千島アイヌは昔からテンキTemkiという蓋付きの小籠を作っている。もっぱら女が作るこの籠は，粗末なムリ草を重ねて作られている。(後略)」(鳥居，1976(1919の日本語訳収録)：432)

C-2. 「蝦夷アイヌもまた同じムリ草で種々の籠を作っているが，その形は千島アイヌの作るものと異なっている。これは注目に価する。(後略)」(鳥居，1976(1919の日本語訳収録)：433)

D. 知里真志保の『分類アイヌ語辞典 植物篇』(1953)の「§392. テンキグサ ハマニンニク *Elymus mollis* Trin.」 「参考」には，次の記述がある。

「葉を乾燥して「てんき」tenkiと稱する絲や針などを入れる小型の容器を編んだ(幌別，えとろふ)。テンキグサとゆう名稱わテンキを編む草の義であろう。但し，テンキなる語わ，i)「手筈」などとゆうような日本語があつてそれがアイヌ語にとりいれられたか，ii)或いわそれが固有語だとすればこの草をもとテンキと云い，それで編んだ容器だからテンキと云ったのであろう。ténk-ki<ritén-ki[やわらかい・稈]か。」(知里真，1976：224-225)

E. 村山七郎の『北千島アイヌ語』に収録される「Dybowskiのシュムシュ島アイヌ語小辞典」には，テンキについて次のように記されている。

「ten^hki 樹皮でつくった容器 tenki a kind of woven basket made of the leaves of *Elymus mollis*」(村山，1971：222)*⁴

これらの記述(特に筆者による引用文の下線部)から，テンキとは主にハマニンニクを材料として編まれた容器(小物入れ)のことを称していたことがうかがえる。実際に，国内外の博物館に



図2. 石狩浜に生息するハマニンニク.
(2012年7月筆者撮影)

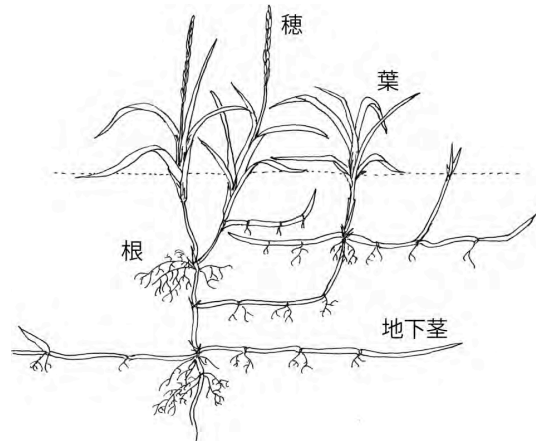


図3. ハマニンニクの各部位.
(齋藤ほか, 2012に加筆)

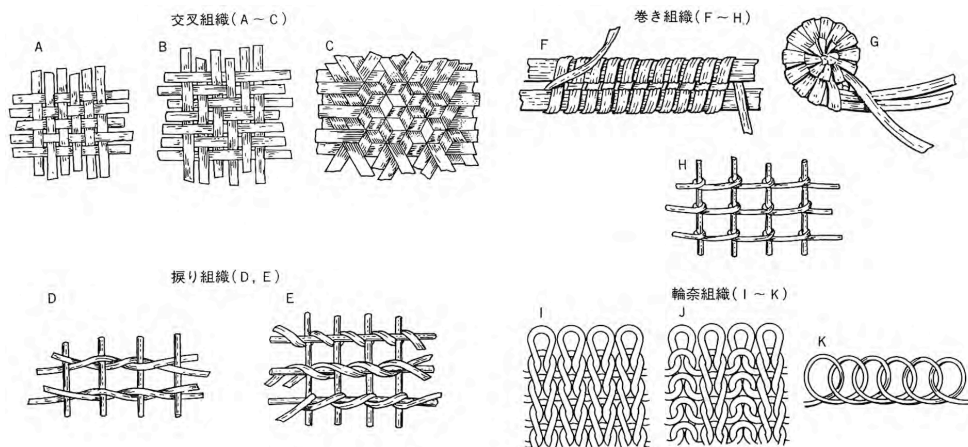


図4. 編物の基本組織 (吉本, 1994)

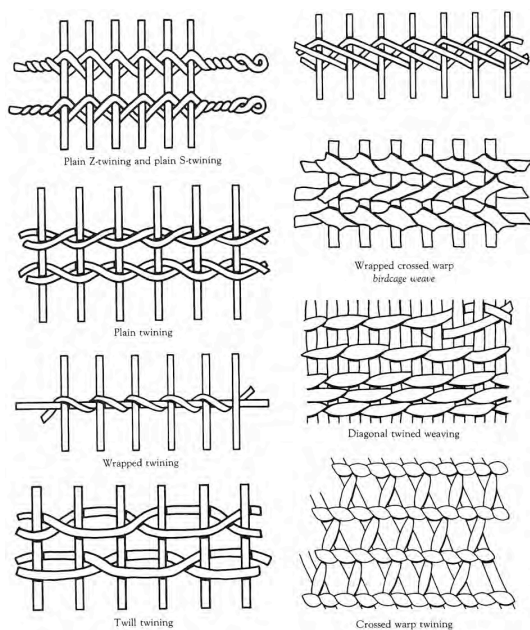


図5. Twining. (Rose, 1983を改変)

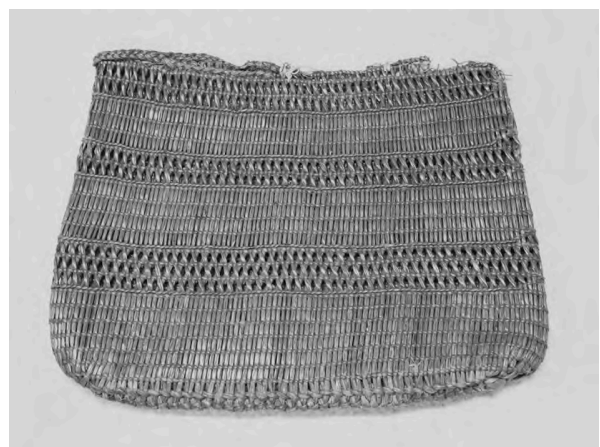


図6. ハマニンニク製の小物入れ (袋状) 214×164mm.
収集: 1936年/伊達有珠/名取武光
所蔵: 北大植物園 [資料番号11004]
(筆者撮影)

残されたテンキの実物をみると、蓋付きの容器には巻編み技法により作られたものが多い。

ところで、1799（寛政11）年、絵師の谷元旦によって描写された『蝦夷器具図式』の「テンキ圖」には、巻編み技法による容器というよりは袋状に編まれた小物入れの絵図が描かれている（谷，1991）。また、先述のBに取り上げた『蝦夷島奇観』に描かれる「テンキ圖」にも、袋状（もしくは籠状）に編まれた絵図が描かれており、絵図「モロチキナ寫生」の記述の中にも、「テンキといふ編み袋」とある（秦：引用B-1）。では、巻編み技法による容器に加えて、もじり編み技法による籠状、さらには袋状に作られた小物入れも、テンキの範疇に含まれるのだろうか。上述A～Eに示した引用文では、テンキの説明において編み技法に言及したものはみられないが、鳥居は蝦夷アイヌと千島アイヌにおいてハマニンニク製の籠の形が異なることを指摘している（鳥居：引用C-2）。

袋状に編まれた絵図の類例に関しては、菅江真澄の『蝦夷喧辞辨』（1789（寛政元年））に描かれたリテンキにも見ることができる（内田ハチ編，1989）。『菅江真澄遊覧記』の「えみしのさへき」には、次の記述と注記が添えられている。

「（前略）遠い蝦夷人がみやげにもってきた渡来物、リテムギ（注二）という籠のようなものを贈られたときにも、（後略）。」（菅江（内田・宮本訳），1966：135）

（注二）「リテムギ蔓で編んだ籠。真澄の随筆〔しののはぐさ〕に、むろちぐさ（この草は茅ににて葉厚く、色はうす緑色）の夏刈りをもって、奥蝦夷のメノコ（婦女）があや模様を入れて編んだ籠。アキヌはこれをリテンギといい、松前の知人はえぞこだすという。このこだすのそそけた毛をとって、産婦に飲ますと、安産するという、とある。」（内田・宮本訳，1966：189）

また、木村兼葭堂（1736-1802）が記した地域別本邦物産分類書『諸国庶物志』（仮題）には、次のようなリテンキの記述がある。

「リテンキ草ニテ造る巾着ニ似タリ」（水田編，2001：90）。

ここに引用するリテンキには、「籠」・「こだす」・「巾着」の記述がみられる。また、先に引

用した知里の記述には、「ritén-ki [やわらかい・稗]」という説明もある（知里，1976：225）。このことから、リテンキについては、巻編み技法による容器に限らず、もじり編み技法によって籠状や袋状に編まれたものを含め、ハマニンニク製の小物入れ全般を指す呼称であったと推測される。

テンキについては、狭義には千島アイヌにみられるハマニンニク製の容器を指し、その製法は主に巻編み技法によるものであったと考えられる。ただし、谷元旦の絵図などに見られるように、もじり編み技法と推測される籠状もしくは袋状の小物入れにも「テンキ」と記されており、広義にはリテンキと同様にハマニンニクを素材とする小物入れとして知られていたものと推測される。実際に、現存するハマニンニク製の小物入れの中にも、絵図に描かれたような、もじり編み技法による袋状の小物入れをみることができる（図6）。

関連して、ハマニンニクを材料としたものづくりは、テンキやリテンキと呼ばれる小物入れ以外に、紐や莫蔭、草衣、刺繍などにも用いられていた。

紐や莫蔭については、知里による次の記述がある。

「北海道でわ「ムリルmurirと稱する葬式の際死者に使う平紐ももとわこれで編んだ。murirとmuritわも同じ語だったと思われる。「らい・ムン」（死の草）とゆうのもそれに関係があらう。樺太ではこれで樹皮などを束ねたり、莫蔭を織ったりした（白浦，落帆）。（後略）」（知里真，1976：225）

ムリル（murir）については、萱野茂による『萱野茂のアイヌ語辞典 増補版』にも、次のように記されている。

「ムリリ【murir】 死体を包んだごぎを縛る紐」（萱野，2002：429）

鳥居龍蔵の『千島アイヌ』（1903（明治36））には、次のような記述がある。

「（前略）、こゝに土器があるとすると、耳が斯う云う風にある、之にムーリと云う草で縄を拵へて掛ける、（後略）」（鳥居，1903：193）

玉蟲左太夫の蝦夷地・樺太巡見日誌『入北記』（1857）には、「安政四年五月廿三日」に次のよ

うな記述がある。

「(前略)、只石狩或ハマシケノ岬ヲ望ムノミ、
尤此海岸サホドノ広サニモナカリシガ、荒草藜々
トシテ其内野蘭ト唱ヒ菅ニ似タル草多ク生ズ、土
人は是ヲ取りテ縄ニ用ユルト云フ。」(玉蟲(稲葉
編)、1992:52)

ここに記される「野蘭ト唱ヒ菅ニ似タル草」
は、ハマニンニクではないかと推測され、石狩湾
周辺においても縄を編む材料として用いられてい
た可能性がある*5。

草衣については、福岡イト子・本間愛之編『上
川アイヌの研究Ⅰ』の「草衣 kera」において、次
のように記されている。

「てんき草(和名 ハマニンニク murit)を縦に
編み、袖なしのようにした。十勝・日高地方では
よく聞いたが、近文地方ではあまり聞かなかった
そうである。今のミノで雨降りのときに用いたと
いう。」(福岡・本間編、2008:74)

3. 残されたテンキ——テーマ展の借用資料から

テーマ展「アイヌの工芸テンキ」では、北海道
開拓記念館から6点、北大植物園から5点のテンキ
関連資料を借用した。これら11点の資料について
は、テーマ展の目録に一覧を掲載した(いしかり
砂丘の風資料館編、2012)。

北海道開拓記念館から借用した資料のうち4点
は、1918(大正7)年に開催された「開道五十年
記念北海道博覧会」に出品されていた可能性のあ
る資料である[資料番号:11353・11354・
11355・11356]。また、北大植物園から借用し
た資料のうち3点は、1879(明治12)年に択捉島
で収集されたもの(うち1点は植物標本)であり
[資料番号:9865, 9869, 10465]、1点は植物
学者である館脇操(1899-1976)によって寄贈さ
れたもの(色丹島収集)である[資料番号:
10297]。製法については、9点が巻編み技法
(うち2点はカンカン帽)、1点はもじり編み技
法(かばん状の小物入れ)であった。

巻編み技法により製作されたテンキの特徴は、
軽くて柔軟性がありながら、容器としての形状を
保ち、その編み目は非常に緻密なことが挙げられ

る。さらに、耐水性にも優れている。今回の展示
資料には含まれないが、巻編み技法により作られ
た容器のなかには水入れに用いられたものも知ら
れている*6。では、ハマニンニクを材料に、テン
キはどのようにして作られたのか。次章では、石
狩浜のハマニンニクを用いたテンキの復元製作に
ついて取り上げる。

4. テンキの製作

4-1. これまでに行われた復元製作

千島アイヌによるテンキ作りは伝承されていな
いといわれている。そのため、博物館に残された
テンキ、民族誌にみられる記述や絵画、近隣の諸
民族にみられるバスケット作りの伝統など、限ら
れた手掛かりを通して製作工程を明かにしていかな
ければならない。

テンキの復元に関しては、知里眞希氏が取り組
まれ、その成果はアイヌ関連総合研究等助成事業
研究報告に「テンキ草で作るアイヌブリ・バス
ケット」と題してまとめられている(知里眞、
2002)。実物のテンキにもとづいた復元製作に取
り組まれたもので、それらの製法が再現された。
現在、この報告が復元テンキの製作技術をまとめ
た数少ないものとなっている。また、これまでに
開催された一般向けの講座では、国立民族学博物
館特別展関連ワークショップ「テンキ編みを学ぼ
う」(2001年)、道立北方民族博物館講座「かご
編み(コイリング)を学ぼう」・「アイヌのかご
細工・テンキをつくろう」(2006・2007年)、函
館市地域交流まちづくりセンター「アイヌの工芸
〜樹皮編み教室」(2007年)などがある。

このたび砂丘の風資料館で実施した親子体験講
座「テンキ編み」では、石狩浜で採取したハマニ
ンニクを材料に、巻編み技法によるコースターの
製作に取り組んだ。コースターは、容器の基本と
なる底部を製作する工程に同じである。また、継
続しておこなった「テンキ2012・秋プロジェク
ト」では、小物入れ(蓋付き容器)の製作に取
組んだ。次節では、ハマニンニクの採取から容器

に至るまでの製作工程について紹介してみたい（図7）。

4-2. 製作工程

（1）材料の採取

ハマニンニクは、地上に葉と穂状花序を伸ばし、地下に地下茎と根が這う（図3）。テンキの材料に用いるのは葉の部分で、これを乾燥させて使用する（図7-1）。鮮やかな緑色の葉を根本部分から採取して乾燥させると、縦方向に細くストロー状に丸まって針のように細くなり、薄い緑色から淡い黄金色になる。

テンキの材料に適したハマニンニクの葉を採取する時期は、いつ頃がよいのか。上述に引用した秦檍磨の記述には、「中秋」に刈り採りテンキを製作する記述がみられる（秦：引用B-1）。また、菅江真澄の記述には、リテムギ（リテンキ）が「夏刈り」のむろちぐさ（ハマニンニク）で編まれた籠としている（本誌58頁に引用）。斎藤玲子は、北太平洋沿岸地域における植物性繊維製品に用いられる草本の採取時期についてまとめ、ハマニンニクについても紹介している（斎藤，1995：123）。この表では、民族によりハマニンニクの採取時期が必ずしも同じではないことが示されている（表1）。復元製作に取り組まれた知里眞希は、採取時期を「夏休み前頃」とし、葉の状態について次のように記している。

「一番中の巻いた部分がある程度伸びた頃、虫がつく前に地際から刈り取る。特に、編みかごに手頃なものは、採れる時期が短い。7月末から8月初めに掛けては、ゴザに使う長いものが採れる。制作に協力してくれた、横山むつみさんは、冬に、採取し、コイリングの小物入れを作ったが、夏に採取したのに比べ、色合いが統一されている。」（知里眞，2002：344）。

石狩浜のハマニンニクの場合には、5月には青みのあるテンキの葉が地上へと伸び始め、7月頃には60～70cm程に成長する。最も暖かくなる8月頃には70～80cm程（長いものは1mを超える）の長い葉が多くなる。9～10月になると葉に痛みのあるものが目立つようになる。実際に夏刈りと秋刈りの材料で巻編み技法をおこなうと、夏刈りのほうが葉の繊維に柔軟性や弾力性をもつようである。葉の状態が、材料の処理・製作工程を左右する重要な点であろう。

（2）採取した葉の処理

今回おこなったハマニンニク採取後の乾燥については、天日干しによるものと、温室によるものとでおこなった。乾燥前の処理としては、重なっている葉をばらしながら痛んだ葉を取り除き、葉の大きさと選別をしておく、使用する際に使い分けがしやすい。乾燥させる際に気を付けることは、湿度の高い環境ではカビが生えやすいことである。多くの葉を束ねた状態にしておくとかびが発生しやすい。広げて乾燥させることで、きれいな材料に仕上げることができた（図7-2）。

（3）編むための事前準備

乾燥させたハマニンニクの葉を用いて編み始める前には、乾燥させた葉を水（または、ぬるま湯）に浸す（図7-3）。乾燥したままの材料には柔軟性がなく、折れてしまうからである。浸した材料を軽くしごく、しなやかさが増して作業がしやすくなる。当時のテンキ製作が、実際にどのような方法で材料を処理していたのかは未解明などところが多いが、前処理を充分におこなうことによって、光沢のある緻密で美しいテンキを編むこ

表1. ハマニンニクの採取時期（斎藤玲，1995：表2より抜粋）。

植物名	採取時期（民族）	文献
ハマニンニク	夏刈り（千島アイヌ）	菅江
〃	まだ青みの残っているうちに（イテリメン）	Krashenninnikov
〃	秋（コリヤーク）	Jochelson
〃	秋（初霜の後）と翌春（ベーリング海エスキモー）	Fitzhugh and Kaplan

とができることは、間違いないであろう。

(4) 編む一容器を作る

編み方については、知里^眞 (2002) を参考に、実物を観察し、巻編み技法による小物入れ（容器）の製作に挑戦した。以下にその製作方法を紹介する。

① 用意したもの

- ・針（とじ針のように針孔が大きいもの）
- ・たこ糸（芯材の太さを均等に束ねるための補助具として使用した。知里^眞 (2002) では、ストローを使用している。）
- ・はさみ

※今回の製作では、この他に、指抜き・洗濯バサミ・霧吹き・新聞紙・ビニールシート・コンテナ（材料を水漬けできるもの）・タオルなどを使用した。

② 巻編み技法の基本ー芯材と卷材

- ・巻き編み技法とは、緯糸となる芯材に、経糸となる卷材を巻き付けながら、らせん状に編み進める方法である。
- ・材料に用いるハマニンニクの葉は、適宜、繊維に沿って縦方向に裂いて使用する。
- ・芯材にするハマニンニクは、複数本の材料を束ねて使用し、足りなくなったら新たな材料を足していく。
- ・卷材は、細身で柔らかい材料を選び、針孔に1本を通して糸のように使う。足りなくなったら新たな卷材を足していく。

③ 巻き始め

- ・小物入れの底部中心から編み始める（図7-4）。
- ・今回は、巻き始めを8の字状に作る方法で行った（図7-5）。芯材で輪を作り、そこに卷材を8の字状に通して中心部を作る。巻き始めのポイントは、中心部に隙間ができないようにすることである。

※円形容器に仕上げる場合、本来は最初の段階から巻編みにより編み始める。ここでは、隙間なく編み始めるのが難しかったため、知里

眞が楕円形容器の編始めとして示している方法を用いて、円形の容器を製作した。

④ 底部の巻編み

- ・中心部ができたら、2周目以降の芯材をらせん状に外周させ、芯材を覆うように卷材を巻いていく（図7-6、図7-7）。卷材を巻く際に、一目ずつ前段の編目をすくうように針を刺して巻き付けることで、柔軟性を持ち合わせながら緻密で丈夫な容器に仕上げるができる。

⑤ 側面の立ち上げ

- ・底部が完成したら、側面の立ち上げを行う。底部では芯材を外側に配置しながら編み進めたが、側面では前段に積み重ねるように芯材を配置し、それを卷材で巻いていく（図7-8）。一周したら続けて芯材をらせん状に積み上げ、前段の目をすくいながら卷材を巻き付けていく。

⑥ 巻き終わり

- ・最後の段は容器の口縁部になるため、段差ができないように芯材を徐々に細くし、最後の卷材は芯材の中に差し込む。

⑦ 完成

- ・材料を湿らせながら製作しているので、よく乾燥させて完成である（図7-9）。

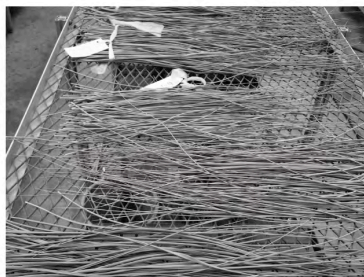
5. おわりに

以上、本稿では2012年に実施したテーマ展「アイヌの工芸テンキ」と関連事業の内容、および成果を中心に述べた。筆者にとって、石狩市の学芸員として最初に担当することになった企画が本事業となった。専門は考古学であるが、身近な植物をきっかけに、当該地域ならびにその周辺にかかわる自然・歴史・文化の知見を深めるテーマに出会えたことは幸いである。今後も、身近な素材から地域の歴史や文化について発見、発信していきたい。

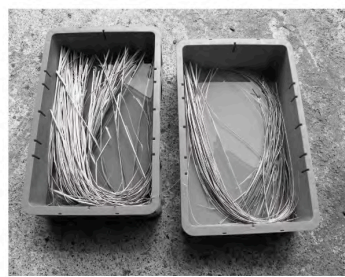
謝辞：テーマ展の開催および本稿執筆にあたり、下記の



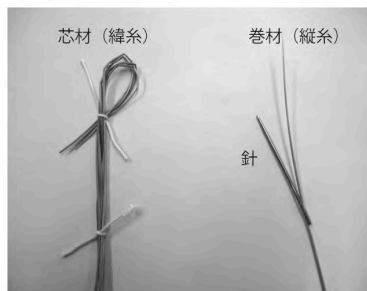
1 ハマニンニクの葉を採取.



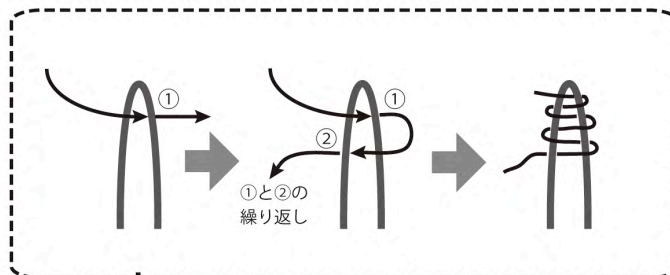
2 乾燥.



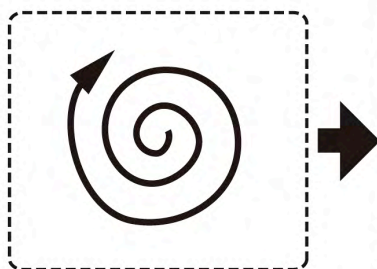
3 編む前に水に浸す.



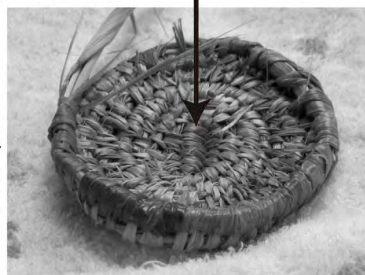
4 編み始め.
(芯材・卷材・針)



5 底部の中心を8の字状に編み始める場合.



6 巻編み技法の基本.
(中心部よりらせん状に外周させる)



7 巻編み技法による製作途中.
(※7と8は別の作品)



8 巻編み技法による製作途中.
(前段の編み目をすくいながら側面を立ち上げる)



9 容器の完成 (写真にコースターを含む).
(体験講座の参加者・いしかり砂丘の風の会の方々による作品)

図7. 巻編み技法によるテンキ作りの製作工程.

機関ならびに次の方々ご協力を賜りました。ここに記して感謝と御礼を申し上げます。(敬称略)。

北海道開拓記念館, 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園, 石狩市民図書館, 石狩浜海浜植物保護センター, いしかり砂丘の風の会(資料館ボランティア)

伊藤大介, 猪熊樹人, 大原昌宏, 小野寺昌人, 大矢京右, 加藤克, 小杉康, 齋藤和範, 下村五三夫, 手塚薫, 出利葉浩司, 内藤華子, 西本結美, 安田秀子, 矢野加奈, 山際晶子, 山田祥子, 山家久美子, 石橋孝夫, 工藤義衛, 志賀健司, 倉雅子, 木戸奈央子

註

- * 1 ハマニンニクという名称からニンニクの一種と思われるかもしれないが、ニンニクはユリ科の植物であり、ハマニンニクはイネ科の植物である。分布については、日本海側では北海道から北九州・対馬まで、太平洋側では北方四島・北海道から千葉県までの砂浜海岸に見られ、周辺地域では、朝鮮半島、東シベリア、千島カムチャッカ、北米のアラスカ・西海岸・北部カナダ・大西洋北部に見られる(齋藤ほか, 2012: 45)。
- * 2 図3に掲載した吉本(1994: 23)の各図出典について、〔図I, Jを除き "Basketry," *The New Encyclopedia Britannica*, vol.2 (15th ed.)より〕とある。
- * 3 絵図は、松前(1781)写本を参照した。
- * 4 英語によるテンキの説明は、「J. Batchelor. *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. 第3版東京, 1926年, 第4版1938年」による(村山, 1971: 135)。
- * 5 工藤義衛(2012: 22)や齋藤和範氏の教示による。
- * 6 国立民族学博物館収蔵資料(東京大学寄託資料)に、「テンキ水入(皿状)」(博物館資料No.K0001832), 「テンキ水入」(博物館資料No.K0001833)がある。資料情報は、「国立民族博物館 アイヌ伝統・文化資料の紹介」(URL: <http://www.frpac.or.jp/clt/mp-b-0002.htm>, <http://www.frpac.or.jp/clt/mp-b-0003.htm>)を参照した。

引用文献

アイヌ文化振興・研究推進機構編, 2011. 千島・樺太・北海道 アイヌのくらし—ドイツコレクションを中心に—. 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構.

知里真希, 2002. テンキ草で作るアイヌブリ・バスケット. アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告 1: 341-378.

知里真志保, 1976. 知里真志保著作集. 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編 別巻 I. 平凡社, pp224-225.

福岡イト子・本間愛之編, 2008. 上川アイヌの研究 I. 旭川竜谷高等学校郷土部.

秦憶丸(佐々木利和・谷澤尚一解説), 1982. 蝦夷島奇観. 雄峰社.

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園編, 2008. 北大植物園資料目録, 6.

北海道開拓記念館編, 2003. 旧拓殖館所蔵民族資料コレクション資料目録. 北海道開拓記念館一括資料目録, 37.

北海道立北方民族博物館編, 2005. 第20回特別展 アイヌと北の植物民族学〜たべる・のむ・うむ〜. 北海道立北方民族博物館.

猪熊樹人, 2006. 色丹島で採集された考古資料. 根室市歴史と自然の資料館紀要, 20: 31-38.

いしかり砂丘の風資料館編, 2012. 平成24年度 いしかり砂丘の風資料館 第2回テーマ展「アイヌの工芸テンキ」展示目録. いしかり砂丘の風資料館.

萱野茂, 2001. 萱野茂のアイヌ語辞典 増補版. 三省堂.

小杉康, 1996. 物質文化からの民族文化誌的再構成の試み—クリアルアイヌを例として—. 国立民族学博物館研究報告, 21(2): 391-502.

工藤義衛, 2012. 石狩浜の歴史. はまなす×いそこもりぐも@石狩浜. 六耀社, pp17-40.

松前広長, 1781. テンキ. 松前志 九十. (帝国図書館所蔵本写)

松前広長(大友喜三編), 1972. 松前志. 北門叢書, 第二冊 国書刊行会, pp95-316.

松浦武四郎(吉田常吉編), 1962. 新版 蝦夷日誌(下). 時事通信社.

水田紀久編, 2001. 諸国庶物史. 木村兼葭堂歿後200年記念. 中尾松泉堂書店.

村山七郎, 1971. 北千島アイヌ語. 吉川弘文館.

沖野慎二, 1999. 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(上). 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要, 5: 1-20.

沖野慎二, 2001. 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(下). 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要, 7: 1-20.

Rose, Roger G., 1983. 'North American and Pacific Basketry: Some Perspectives', *"Pacific Basket Makers: A Living Tradition"*, University of Alaska Museum, Fairbanks, Alaska, pp37-56.

齋藤和範・内藤華子・高嶋八千代・木場英久, 2012. 北海道石狩市石狩浜で見られるハマニンニク

- (*Leymus mollis*) の穂状花序と円錐花序の二型に関する覚え書き. いしかり砂丘の風資料館紀要, 2 : 45-48.
- 齋藤玲子, 1995. 北太平洋沿岸地域における植物性繊維製品についての考察ー編物を中心とする物質文化研究ー. 北海道立北方民族博物館研究紀要, 4 : 113-134.
- 齋藤玲子, 2005. テンキグサ (ハマニンニク). Arctic Circle (北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌), 57 : 19.
- 齋藤玲子, 2006. かご編み (コイリング) を学ぼう. 北方民族博物館だより, 62 : 5.
- 齋藤玲子, 2007. アイヌのかご細工・テンキをつくろう. 北方民族博物館だより, 67 : 6.
- 佐々木利和, 2001. テンキ. アイヌ文化誌ノート. 吉川弘文館.
- 菅江真澄 (内田武志・宮本常一訳), 1966. 菅江真澄遊覧記 (2). 平凡社.
- 玉蟲左太夫 (稲葉一郎編), 1992. 入北記. 北海道出版企画センター.
- 谷元旦 (大塚和義監修), 1991. 蝦夷風俗圖式. 蝦夷器具圖式. 足立美術.
- 鳥居龍蔵, 1903. 千島アイヌ. 吉川弘文館.
- 鳥居龍蔵, 1976. 考古民族学研究・千島アイヌ (小林知生訳). 鳥居龍蔵全集 第5巻. 朝日新聞社, pp311-553. (原典:1919 Etudes Archéologiques et Ethnologiques. Les Aïnou des Iles Kouriles. 『東京帝國大學紀要第42冊第1編』の日本語訳を収録)
- 内田ハチ編, 1989. 菅江真澄民俗図絵 上巻. 岩崎美術社.
- 山田伸一, 2000. 拓殖館のアイヌ民族資料についての覚書. 北海道開拓記念館研究紀要, 28 : 179-197.
- 吉本忍, 1994. 編物. 文化人類学事典 (縮尺版). 弘文堂, pp22-23.

'Tenki'; Basket woven with Leymus mollis

-Report from the thematic exhibition "*Tenki* of Ainu crafts" and the related events-

Chie ARAYAMA

Key words: *Leymus mollis*, *tenki*, Ishikari Beach, basket making process, coiling